

騰々舎と任運荘

— 家に母 施設に寮母 —

50年、特別養護老人ホーム任運荘を創設したとき、重度重複の脳性マヒの障がい者施設を併設することを構想していた。大分県にはそのような施設がなかったからである。日本の福祉行政の悪い傾向として、重度の者は後回しという、ふつうでは考えられないことがある。重度こそ真っ先に手をつけねばならないのに。

今では考えられないことだが、脳性マヒの重度障がい者は、精薄者関係の法でも身障者関係の法にもがいていしないという冷酷な法解釈で、放置されるといふ事態が、つい10年近くまであったのである。福祉が本当の福祉に値するならば、逆にその何れの法でも援助は可能であるとすべきであろう。

私は、10年前、騰々舎が発するとき、「最重度最優先入所」のスローガンを心の中に高く掲げ、福祉事務所にもそのことをお願いした。騰々舎の職員よくその苦勞に耐えて、今日に至っているが、その旗印は今も降ろされていない。ありがたい。私は、職員に敬礼する。

わが父 わが師

県庁を退職する一県職員であった私が、二つの施設を構想する財政的力を持ちあわせるはずはないが、父の財産をすべて提供されることが許されていたからのことである。父は刻苦勉励のひと、母はそれ以上に、文字通り爪に火をともし節約で、ある程度の蓄財ができた。公立とちがつて私立福祉施設には私的事情や理想があるものだ。任運荘も騰々舎も、わが父なくしてその誕生はなかったというべきである。父の思い出を記したものである（大分合同新聞「灯」56・4・16）。父といっても養父であるから、なおさら感謝の念は深い。

90を過ぎてはいたが、突然倒れた父は入院数日の看護であっけなく昇天していった。今年の桜もちりそめるころであった。

父は苦学力行、徹底節約の明治の代表のような人であ

った。くつ一足で30年もおし通し、おはしは戦前からのものを使い続け、ちびてしまい子供用の長さになっていた。しかし、このように刻苦して貯めた金を、自分の楽しみに使うのを私は見たことがない。たまの外食もカレーかラーメンに限られていた。結局、ひとのために使われていった。

父は貧乏子だくさんの3男に生まれた。貧窮を脱するため大阪に出て、亡母と共に過酷なまでに働き通した。故郷沖繩の一族の子弟たちはその父を唯一の頼りに上阪する。昭和初期のあの空前の不況時である。世話した数は60を下らなかった。

父というが、私は養子である。私の実父は父の実兄。二人は10人きょうだいの中で二番仲良しだが、性格は正反対だった。律儀節約の弟と違い、兄は大胆おうようで、20歳代で市(首里)の議員になるほどの派手さ、従って一栄一落も激しかった。広大な屋敷は人手に渡らなかつたが、弟の経済的援助によるものである。「兄弟の金は困った時はいっしょだ」と、実父がいったのを子供心に覚えてる。

その実父の命は昭和20年沖繩ですでに飛散しているが、死の日も場所も不明。父を

最後に見た人の話では、民や兵の逃げまどう戦場の路傍で父は負傷兵を介抱していた。逃げようとせかしても、「わしの息子が戦地でこんなめにあっているかもしれ

ない」といつて、動かなかったとのことである。

私の二人の父、この兄弟は今ごろ天国で久しぶりの再会を喜んでいるだろう。私が老人ホームを計画すると、弟父は念をおしながら、それでも全財産を提供した。最後までひとに捧げた一生のようだ。ああ、父二人。よい父たちよ。

最初の特別養護老人ホーム「任運」荘と名づけ、次の重度障がい者施設に「騰々」舎とした。それは良寛を深く敬慕していた私の恩師で下村湖人が、良寛の常に愛用した「任運」「任天」「騰々」の語を合わせた「任運騰々」から拝借したものである。

説明するまでもなく、任運とは運命に任せること。運命を離れて人は存在することはない。騰々とは、高く、常に高く、いやが上にも高らかにという意味。父が幼児の私にタコを作り、あげてくれたが、「あがれ、あがれ、天まであがれ」と言っていた言葉を思い出す。世の親がわが子に託す希望である。人生への積極姿勢。前者は耐える受け身の姿勢。人間はこの二つの生き方を同時に持つもの、持つべきものという思想である。

わが二つの施設の根本理念は、任運騰々である。正門に湖人筆のその石碑が、来る人すべてをその想いで迎え入れている。

(下村湖人は『次郎物語』の著者として不朽の名を留

めているが、湖人と私との関係は、拙著『旅路の終わり
で』（ミネルヴァ書房・60年）9章でふれているので、
ここでは述べない）。

利用者本位とは

初代の施設長は私の長男であるが、まだ若いのでたしかに多少の危惧はあった。ひとの心の多様さと深さを知るには、ふつう、経験という年月を重ねねばならないからである。

彼は言った。「任運荘が生き生きしているのは、創設
当時から職員皆が関わって、任運荘は自分たちのものと思
っているからだ。だから、騰々舎は任運荘から半分以
上も職員を回すということをしないで、全部新職員で始
めたい」。その言は荘、やはり、親子の情、彼に託する
ことにした。

見ておれんことが幾つかあった。口もしばしば出
た。しかし、それは逆効果だったことに、後で気がつい
て、言わないことにした。それから、ほぼうまくいっ
ているようだ。入居者本位、利用者本位であれば、福祉
施設はうまくいくものである。

彼は、利用者が泣いているとき、それは多くは職員の
言葉などで泣かされているものだが、職員を責めること
を第一としていた。私は、それが分かっていたらと安心

している。まず、利用者をかばうことが施設長の条件で
なければならぬ。利用者よりも、職員をかばうことを
優先するとき、施設は本末転倒し、みるみる腐敗する。
しかし、そういう人たちはその腐敗していることさえ気
付かないものである。

施設長は利用者のほうだけを本気に見ておればよい。
職員も自らそうなるであろう。

そうすれば施設は本来あるべき途を辿っていく。「私た
ちの施設は、職員が楽しく働いていれば、それでよいの
です」と言う施設長に出合ったことがある。この明るく
楽しんでいる職員を見よといわんばかりに。施設長と職
員が仲よさそうな談笑風景が、そこにはあるのかもしれ
ない。しかし、職員は笑っていても、利用者たちが泣い
ていないという保証はどこにもない。ふつうは逆で、職
員が笑っていれば、入所者は泣いていると思うべきであ
ろう。

経営者（園長）は職員に向き、職員は経営者を向く、
そして、利用者不在になる。―これが施設内の人間関係
のありがちな構図である。

自分がしゃんとして

騰々舎開所当初、一挙に30人余りを採用したから、玉
石混淆、考えられない事件が幾つも表明化する。

深夜、寮母がものも言えず動きもできない利用者を、たたいていたのである。向こう側でそれを見ていた利用者が、「こわい、施設を出たい」と母に訴え、その母からの訴えで分かったことである。その寮母は去っていった。

ものかげで初老の男性が泣いている。わけをきくと、ある寮母から「あんたが告げ口したんだろう」と凄まじいことである。この寮母Kはひどい事件を起こして、私たちに強く叱責されていた。事件とは。――まだ食事介助中なのに、彼女が横から来て、さっさと下膳していったのである。介護している職員がそれを制しなかったのも異常、無責任だが。なぜ横あいから下膳したのか、わけを他の職員から聞いてやっと理解できた。Kは後片付けの後、遅番で、下膳を早くして帰りがかったのである。なぜか。夜のアルバイトをしていたから。

その時点で、即刻解雇を施設長にすすめたが、彼はためらっていた。しかし、利用者が泣いていると知った時、決断した。利用者本位、ある日ある出来事でのもの悲しい場面である。

なお、その事件が発覚するのは、ものかげで泣いていた者ではなく、他からの訴えであったから、今まで一、二回だけではなかったことになる。また、他の職員がKに抵抗できなかった無気力さにもわけはあった。Kは「放送局」の別名があったほどで、その悪宣伝にかかる

と狭いむらでは暮らしにくくなることである。

こんな陰湿な空気は最悪事態である。しかし、まともな職員も当然いるのだから、永く続くことはない。芽は職員どうしで、何らかの形で摘みとられていたようだ。自浄能力のない職場は、一見楽で楽しそうに見えるが、ひとをただ墜落へとさそいゆくものである。

私の先輩であり師である永杉喜輔氏（群馬大学名誉教授）は警告されている。

「福祉をやっている人は、まず自分を鍛えるということが非常に重要になってくる。自分自身が人間的向上を目指してゆけば、よりよい人間関係をつくっていかざるを得なくなるのです。自分がしゃんとしないと、よい関係はできっこないです。よい職場関係をつくるには、自身が無限の向上を努力する。それ以外にはない。」

管理者たちよ

福祉施設のよしあしは、すべて経営者、管理者の責任である。これほど自明のことはない。だのに、職員の質にその責を負わずひとたちがいる。悪い職員をその職場にはびこらせるのは、誰でもない。管理者である。この13年間に、任運荘、騰々舎を合わすと事実上の免職者は十指に余りあるほどである。利用者には有害であればさつ

さと去つてもらう。公立でなくても、私立でもそのことは勇気のいることである。管理者がどれだけ利用者本位に徹しているかが、ここでも、じつは問われていることになる。

しかし、働いてもらっている限り、私は騰々舎、任運荘の職員約60名に最敬礼している。私ひとりに何ができるといふのであろうか。生活施設としてのこの終の住み処が現在あるていどの水準を保っているのは、全く職員のおかげである。とくに、寮母集団の献身、文字通りその献身は崇高とさえ思う。

ひとは皆過つ者である。過つても、利用者本位を理解し、それに立ち返る者であればよい。先に職員への忠告をなされた永杉喜輔教授の師、また私の恩師下村湖人先生の言葉を、ここでも掲げよう。私はしばしばこの言葉を引用してきた。

「職務上の上位者が人間としては勿論のこと、知識技能の点でも上位者であることは極めて望ましいことである。しかし必ずしもそうでないのが実社会の現実である。この現実を謙虚に認識するところに、職務上の上位者が上位者としての責任を果たす道が残されているのである」。

六つの実現

なぜ、私たちが寮母たちに最敬礼するのか。こびてはいらないかと言われる向きもある。

そうしておだてて使う途もあるとするひともある。そうではない。本気で、「寮母は宝」と感謝する。

本年63年の年賀状を直接間接にお世話になった方がたに出した。

任運荘は13年、騰々舎は10年めの新年を無事に迎えることが出来ました。これはひとえに、日頃のご厚情によるものと、改めてお礼申し上げます。

両施設とも利用者と職員の手探りの歩みでしたが、次の6点だけは最低の充足目標として実現出来るようになりました。(1)利用者の自由意志を束縛しない。(2)おむつは濡れたらすぐ換える。(3)床ずれなし。(4)間仕切りカーテンで尊厳を守る。(5)悪臭追放(6)ぼけたお年寄りの異常行動は職員の問題処遇に起因する。その上で、自由意志のより積極的な発現をめざして、努力をつづけたいと存じます。騰々舎の10周年を記念する本年の五月祭は、とくに意義あるものにしたいと考えています。

入居者、ここを生活の場所と決めている利用者にとつ

て、この目標は最低限度のものにすぎない。反面、この目標の達成、その日々の実現は、私たち二つの施設の現状からすれば、ぎりぎりの限界に至る努力の結果である。職員、わけても寮母のこの努力、寮母集団のこの実績を、施設を知る者であれば、俄かには信じがたいであろう。

施設には寮母の外に指導員、看護婦、栄養士、調理員、事務員等と職種は多い。しかし、私はこの実績の一切を寮母集団に帰せしめることにいささかのちゅうちよもない。

寮母職に対し、他のすべての職種の者たちが、施設長をふくめて、協力者の位置に立つ時にのみ、この実績は実現するのである。その職種の人たちがそう自覚するのでないかぎり、施設生活を真実見てとはいえない。寮母職への協力者に徹すること以外に、本当の仕事はない。

こういう観点に立っているから、私たち二つの施設は今の段階に至りえている。

家に母 施設に寮母

一家の中心は母である。施設の中心は寮母である。

生活とは日常雑事の集合体である。衣食住、健康、看護、教育等、精神身体全面にわたるものである。施設生

活であれば、寮母職はその全体に関わる責任を負わされている。逃げられないのである。他の職種は、それらうちの一部分に関わるもので、専門性の言葉や資格の故に、全体的責任からのがれることができる。

母は女性であれば誰でもなれる。しかし、母になることほど至難なことはない。それと似て、誰でもなれる職が寮母職である。しかし、寮母職を十分に果たすことは至難なことである。

私は施設における寮母集団の功を評価し称えた。寮母ひとりひとは、ふつう、資格もなく、ただの主婦だった人が多く、職業婦人の経験も浅い。それらの人が集団として仕事をすることで、偉大なことを成しえている。

しかし、寮母集団を分解して、一人一人を考えたとき、玉石混淆は否定できない。集団各人の責任感をうすくし、まぎらわす。そこから小過失がぼろぼろ日常茶飯事の如く続出する。やがては重大過失につながっていく。粗雑な言動、マナー、それらは寮母に宿命的につきまとう。心ある管理者ははらはらの連続であろう。経営者側の汚職を除けば、施設での大小の事故、不祥事の多くは、寮母たちのそうした集積の上になされたものである。

だから、寮母が無条件に尊いというのではない。寮母職が施設の要であり、それを忠実に果たしている寮母が宝だといふべきである。私は「寮母は宝」と信じる。

任運荘と騰々舎のちがひ

棟続き、そして同一法人経営の両施設は似ている点も多いが、違っている点も多い。先にあげた六つの目標は当然共通であり、同じように実現されている。両者に差異があるのは、一方は老衰に向かう人たち、一方は比較的若い人たちということによるのが最大の理由であるが、実際運営上の経験や考え方の差異から来ているのも多い。

例えば、騰々舎には各人の部屋の入口には勿論、どこにも名札はない。何のための名札か、という問いかけがそこにはある。ひとに知ってもらうためなら、そんなものはいらない。自分が知るためなら、やはりよく知っているから、そんなものはいらない。

任運荘は、ふつうの通り、各人の名札が部屋入口に掲げられている。それどころか、居室棟廊下には50人分の紹介写真と紹介文が大きく、そして平等に飾られている（展示されているともいってよい）。騰々舎から見れば、異常異様といえよう。

私はこのていどの差異は、何れでもよいと考える。職員や利用者が選ぶことであり、決めることである。しかし、いろいろ議論のあることだろう。何れでも理論づけは簡単だから。

多くの場合、私は決定的にこうでなければならぬという考え方をとらない。それぞれがそれぞれの立場で決めればよい。だから、全く正反対の決定でも干渉しない。しかし、多くの事柄のうち、時にはどうしてもゆずれない事が起こるときがある。それは年に一・二回でいいである。

一般の来客、つまり民生委員とか関係機関、施設職員等の来訪があると、利用者のためにさつと居室の戸を職員はしめてあげる。部屋をのぞかれることから守るために、本来居室の戸は外部に対し閉めるためのものである。それは根本的に正しい。絶対的に正しい。大通りの如く、廊下だけでなく施設内を、居室内までも入りこむ民生委員たちがいる。また、施設によつては、そんな無作法な連中でもない、とにかく大勢の人が来ることを、何か施設の高い評価の如く思う人がいたりする。入居者の心など関係ないというふうな。それが施設の社会化ともいう。この人たちには何も見られていない。

そのことについても、騰々舎は任運荘と少しちがう。任運荘は、特養が療護施設よりずっと多いため、おつきを頂いているホームが多数で、来訪される職員も多数で、見学を熱心に希望する。職員だからマナーは当然心得ているので、お年よりへの声かけをお願いした上で、任運荘内の観察をもらうことで、何とか辻褄を合わせる。つまり、お年より個々への訪問客のような姿にな

る。それ以外の大勢の団体は歓迎しない。

合同の行事は最小限度に

初め、私は両施設の行事はすべて一緒に考えた。にぎやかになるし、職員利用者間の中広い交流にもなるから。しかし、それは全くの観念論にすぎなかった。総合の名の下に、それぞれの施設の個性、独自性を殺してはならない。管理者の一方的な自己満足ですべてを一本化するとは愚かなことだ。

だから、最低限度両者一体の行事は数回にすぎない。年の初めの全員の互礼会、創立記念の五月祭、秋の運動会、敬老会（騰々舎利用者職員が任運荘のお年よりを敬老する）の四つである。しかし、これをもし一緒にできないとあれば、それはもう人間生活とはいえなくなる。両者が共通目標としている6つの項目についても、同時スタートではない。数年前から揃って実現できるようになったのである。

おしめが濡れたら早めに換えるいわゆる随時交換、そして、床ずれゼロは、やはり任運荘が先輩でありリーダー役である。騰々舎は、「任運荘に学べ」をスローガンとしてきた。

騰々舎の間仕切りカーテンの徹底ぶりは天下一品である。昼から各自がその城をカーテンで築いているとい

った感じ。カーテンを勝手に開けることは職員でも許されていけない。任運荘は夜間はともかく、昼はおむつ交換、ポータブルトイレ使用、着替え等にしか閉めない。

利用者の自由を尊重する。これまた騰々舎は徹底している。職員がそれを意識的に努力しているのもめざましい。利用者の“危険をおかす自由”までも追求しようとしている。

そのことは必然的に、自治活動に私たちを導いていく。騰々舎にもし誇るべき何かがあるとすれば、自治活動を第一にあげねばならない。すべては自治会で決定し、実行は委員会に移し、職員はそれを忠実に支援する。例えば、部屋替えのとき、職員がいかに知恵を絞った案でも必ず誰かの苦情にあうが、自治会の決定した案には一人として反対はしない。

任運荘は当然だが、騰々舎にも施設側が決めた規則は一切ない。しかし、騰々舎自治会のお互いが決めた決まりは法3章ていどだが厳と存在する。

任運荘にも自治会はある。自治意識はもはや微弱なものになっていくが、人間集団である限り、当然内部から必要とされてくる。寮母さんが病気をしたとき、お見舞いをしたいとする者が出てきた。人間として当然の感情である。皆で相談することをすすめたことから、自治会が発発した。ここには世間がある。つきあいがある。しかし、ただそれだけ。

騰々舎の自治会は任運荘と違って絶大な権限がある。権限は義務を同時に意識させるので、今のところ均衡ある施設生活が営まれている。均衡が破れるとき、自治会はまた自分たちの苦悩の中から再生の道を見つけている。自治とは、その見つける力をじつは養っているからである。

余談になるが、職員の慶弔見舞いに自治会は一切金を出さないよう規則を変更せよ、という県の監査指摘があった。私はお断りした。当然ながら自治会に指図はしたくないからである。また、本来、この自治会の出発が寮母の病氣見舞いにあつたから。

余談にはまたおまげがついていた。県のこうした指摘をせざるをえない事件があつたかららしい。ある特養でホーム園長の細君が死亡したとき、利用者全員（80人）からとして香典40万が吸い上げられていたのである。その園長は開き直つて言ったとか。「社会通念として香典5千円は高くない、半額でいどだ。それがなぜ悪い」と。ああ、社会通念を持ち出す根性は余りにもゲビている。

長い記述を終わろうとするとき、この品位のない話で結ぼうとするのは本位ではない。しかし、施設管理者は金銭欲と名誉欲から遠く離れて立っていないければならないということは、頗る根本的なことである。施設運営

において金銭と名誉を食らなことが第一歩であり、また終局である。このことさえ自らに警戒すれば、誤りない福祉の大道を歩み続けるであろう。

金銭欲が悪いというのではない。ただ施設を舞台とするそのことこそ追求が絶対いけないというのである。名誉欲が悪いというのではない。福祉事業にかけたその虚名の追求に夢中になるのがいけないのである。いろいろの試しをして、ついには利用者不在のまま、いささかマスコミにもはやされている者など、その一例である。

（1988年5月22日 騰々舎10周年記念誌 // 任運騰々より）